



## パ リ の 夏

田村泰次郎

パリの夏は、みんな、ヴァカンスへ出かけて行つて、街はがらんどうである。山の手の裕福な連中は、七月にはいると、気早いヴァカンスへ、北のノルマンディーの海岸や、南のコート・ダジュールに出かけてしまうが、下町の庶民階級は、カトルズ・ジュイエ（七月十四日のパリ祭）がすむまでは、パリを留守にしない。カトルズ・ジュイエで、踊り歌つて、大いにたのしんでからでないと、名こり惜しいらしい。

それでも、パン屋の親爺も、靴屋のあんちゃんも、洗濯屋のかみさんも、みんな、ヴァカンスへ行つて、九月にならないと、パリへ帰つてこない。私たちのようなホテルに泊つて、外食をしている者には、行きつけの食堂でさ



"14 JUILLET" à PARIS—Feux d'Artifice au PONT-NEUF (cl. Viauier)



内容をそろへるようになった。  
そんな季節に、騒々しい盛り場を避けて、住宅街にでもいると、屋間などに、動くものがあると、猫の影くらいである。私はその頃のバリの、そんな場所が好きだ。空は高く晴れ、空気はひえびえと澄んで、肌に快い。マロニエやアカシヤの並木は、午後の陽に葉をかがやかせてはいるが、眩しいほどではない。なかには、もう黄いろく枯れかかっている葉もある。パリには、夏のさなかに枯葉がある。私がいるとき、小さい颱風がパリをすぎた。あとには、マロニエのまだ青い未熟な実が、実の根もとから葉をつけたままもぎとられて、路上に転々ところがついていた。なにか痛々しくて、その青い実を拾ってきても、私は自分の部屋の花びんにさしておいた。むりやりにもがれた青い実は、やはり、いのち短いさだめなのか、翌日はすでにぐったりと頭を垂れていた。

(作家)

へも、一家中で出かけて、そのあいだ、店を閉めてしまうので、不便で仕方がない。それというのが、パリのひとびとの生活がそれだけの余裕があることも事実だろうが、一つには年二ヶ月の有給休暇を使用人にあたへなければならぬ、という雇用規定があるからである。それとも一つ、パリの冬は、いつも空がどんよりと曇っていて、太陽が見られない。せめて、夏のあいだだけでも、出来るだけ紫外線を取り入れて、体内に蓄積しておかないと、紫外線不足のいろんな病気になるので、どうしても保健上夏二ヶ月から三ヶ月のヴァカンスは必要なのである。

住民の出払ってしまったパリへは、アメリカ人をはじめとする世界の国々のツーリスト(観光客)が、どっさりとはいりこんでくる。シャンゼリゼ・オペラ付近、モンパルナスは、ツーリストたちで、昼も夜もぎわめいている。モンマルトルのような浅草的な庶民の遊び場にも、もの珍しさで観光客があふれている。

夏のパリは、好奇と満足の眼を光らせた観光客のひとり天下である。パリににとっては、お金をばらまいてくれる大切のお客さまだから、この頃はオペラや、お芝居や、絵の展覧会なども、秋のシーズンを待たずに、相当に見応へのある